

ピアノ・ソナタ 第 11 番 変ロ長調 op.22

「このソナタは素晴らしいものです」と述べるほどの自信作だった。変ロ長調という調選択、第 2 楽章を下屬調にするなど、古典派ソナタの伝統を引き継いでいるが、4 楽章構成を採用し、対位法的な要素を多分に含み、第 1 楽章の要素を第 4 楽章で再び使用するなど、古典的枠組みの中で新しい試みがなされている。この後ベートーヴェンは、ソナタ形式の楽曲を第 1 楽章に置かないなど実験的なことを試すようになるので、古典的なスタイルの総決算的作品と言える。

ピアノ・ソナタ 第 20 番 ト長調 op.49-2

前曲とは対照的に堂々とした雰囲気が始まる。第 1 楽章では 3 連符の動機が多用され、曲中で重要な役割を果たす。第 2 楽章はロンド形式のメヌエット。なお、この曲の第 1 主題は、七重奏曲 (op.20) やピアノ三重奏曲 (op.38) の第 3 楽章の主題として再利用されている。

ピアノ・ソナタ 第 8 番 ハ短調 op.13 《悲愴》

第 1 楽章には「重々しく」と記された序奏がついているため、それまでに書いた 7 曲のピアノ・ソナタとは大きく違うように見えるが、この形式はベートーヴェンがボン時代の 1782 年から 83 年に書いた「選帝侯ソナタ」(WoO.47) の第 2 番にもすでに見られる。第 1 楽章は重厚な和音の響きにアリア風の旋律、急速な分散和音の楽想が錯綜する。第 2 楽章の旋律は「ベートーヴェンの全作品中でも指折りの音楽」と評されるほど美しく、魅力的。第 3 楽章は分散和音の伴奏音型の上に単旋律が奏されるという、それまでの楽章と比べるとかなり簡素なつくりになっているが、これはヴァイオリン・ソナタ第 3 番 (op.12-3) の第 4 楽章として構想されたことが影響していると思われる。

ピアノ・ソナタ 第 25 番 ト長調 op.79

これまで様々な革新的手法でピアノ・ソナタに向き合ってきたベートーヴェンだが、この曲は非常に古典的で、技巧的にもかなり平易な作品。そもそもベートーヴェン自身はこのソナタを「やさしいソナチネ」というタイトルにすると出版社に手紙を書いていたのだが、なぜか自筆譜には「ソナタ」と印刷されたため、現在ピアノ・ソナタのうちの 1 曲となっている。「かっこう」とも呼ば

れるように、それを思わせる音型が使用されていたりして、特徴のある曲ではある。

ピアノ・ソナタ 第21番 ハ長調 op.53 《ワルトシュタイン》

1803年、ピアノ・メーカーのエラール社からベートーヴェンにピアノが贈られた。新しい機構を備えたこの楽器は、音域が5オクターヴ（61鍵）から5オクターヴ半（68鍵）に拡大したことに加え、連打がしやすくなるなど弾きやすさも向上していた。第1楽章冒頭の和音の連打にはその弾き心地に対する感動が聴き取れる。形式上でも新たな試みがなされている。このソナタには通常第2楽章（緩徐楽章）はなく、代わりに「序奏部」と記された“つなぎ”が置かれている。第3楽章は繊細な分散和音の中から静かに浮かび上がるように旋律が奏される。ペダルの積極的な使用も指示されており、新しいピアノの音色や響きを味わっているベートーヴェンの姿が浮かんでくるかのようだ。